

1

長野県・白馬駅（2年前）（昼）

白馬駅前のロータリー。人はほとんどいない。

客待ちのタクシーが、暇そうに並んでいる。

そこに改札口から、小さな旅行鞆を持った一人の青年が出て来て、立ち止る。―海人祐介（26）。

海人 「ぼんやりと……」

海人はボサボサの頭で、無気力なイメージ。

海人、紙を取り出し、ぼんやりと歩いていく。

2

田舎道にある踏切（2年前）（夕）

手に持った紙を見ながら、歩いて来る海人。

踏切の前では、優しそうな老婆が立ち止っている。

【チン、チン…】とゆっくり遮断機が下がり、海人も立ち止まる。

持っている紙には【ホテルコパン】の地図が書かれ、

その地図には『求人募集…』『広大な自然！自然！自然！見渡すアルプスと白馬ジャンプ場…』と書かれている。

海人 「（それを見て）…」

踏切が開くのを待つ、老婆と海人。

しかし中々、電車は通らない。

目の前を見れば、ただただ悠然と広がる白馬の山々。

海人 「（山々を見て）…」

老婆が、優しく海人に微笑みかける。

老婆 「（優しく微笑み）良いお天気ね」

海人 「…」

海人、老婆に答えることなく、踏切が開くのを無表情で待つ。

海人と老婆の前を、電車が通り過ぎる。

タイトル 【ホテルコパン】

3	<p>ホテルコパン・外観（現在・10月）</p> <p>白馬の山々に囲まれ、ポツンと佇むホテルコパン。山々は紅葉で化粧し、長野オリンピックで使われた白馬ジャンプ台が目の前に見える。</p> <p>ペンションからホテルに改装した為、さほど大きくない5階建てのホテル。</p> <p>【ホテルコパン】と書かれた看板を丁寧に磨いているホテルオーナー、桜木悟（50）。</p> <p>テロップ『2年後』</p>
4	<p>同・中一階</p> <p>一階にはフロント、そして窓の外には美しい山々が見渡せる小さなラウンジがある。</p> <p>フロントには、髪を整えたホテルマンとして働いている海人（28）。</p>

海人、ボーっとパソコンの中の天気図を見ている。

海人 「ボーっと…」

ラウンジには、椅子に座り窓の外を暇そうに眺め煙草を吸っている、コック兼清掃係の片山ユリ(25)。

ユリ 「(無愛想な表情で煙草を吸い)…」

そこに外から桜木が帰って来て、

桜木 「(上機嫌で)良い天気！白馬の山も絶好調だよ！好調好調！」

ユリ 「(無視して)…」

桜木 「吸わないでよ、こんなところで」

ユリ 「(窓の外を見ながら)良いじゃん、客居ないし」

桜木 「居るよ。502号室に居るよ」

ユリ 「一組じゃん」

ユリ、立ち上がって、キッチンへ向かう。

桜木 「…」

桜木、フロントの中に入ると、大切に飾られている

【1998年長野オリンピック】と書かれた、お客

で賑わっているホテルコパンの写真を磨きだす。

桜木 「(磨きながら)：海人、今日いらっしやるお客様は？」

海人 「チェックイン少し遅れるって、さつき電話ありました」

桜木 「何で？」

海人 「道迷ったみたいです。でも教えときましたから」

桜木 「：そっか、迷っちゃったか」

そこにユリが来て、桜木にメモを渡す。

ユリ 「(メモを渡し)はい」

そこには【牛肉10キロ、キャベツ4玉、玉ねぎ3

キロ：】などと食材が書かれている。

桜木 「(見て)：」

ユリ 「良く喰うのよ、502の客」

桜木 「今日で一週間だもんな。よっぽど気に入ってくれたんだ

な、ウチのホテル」

ユリ 「人がいないからやりまくれるだけじゃない？宜しく」

桜木 「：」

冷めた感じで廊下へと消えて行くユリ。

5

山間を抜ける道

軽トラを走らせている、桜木。

山道を歩く若いカップル、浜名美紀(19)と斑目孝介(22)に気付かず走り去る桜木。

美紀、デジカメで景色などを写真に撮りながら、嬉しそうに斑目の手を握り歩いていく。

6

道の駅・野菜売り場

新鮮な野菜がたくさん売られていて、近所のお客で

そこそこ賑わっている店内。桜木が野菜を籠に

入れる様子を、店主の川相(53)が見ながら、

川相 「どうよ調子は？」

桜木 「(野菜を選びながら)：絶好調だね」

言葉とは裏腹に、真顔の桜木。

川相 「無理すんじゃないよ、それが絶好調って顔かよ。あ、キ

ユウリ上手いよ」

桜木 「ああ(キュウリを入れ)」

川相 「…それよか聞いた？丸さんそこ」

桜木 「…何？」

川相 「とうとうホテル売りに出したってよ。2千万で」

桜木 「…」

川相 「ただどこも買い手付かないんだと。参ってるよ、丸さん」

桜木 「…そっか、頑張ってたのにな、あの人」

川相 「全盛期から比べりゃホテルも三分の一だ。無理ねーよな。

意地張ってやってても、客来なきやよ(別のお客が来て)

いらっしやい！」

その場を離れて行く川相。

桜木 「…」

ふと賑わう店内を見ると、お客たちは同じ野菜を見

比べて選んでいる。

桜木 「？」

するとどの野菜にも、【生産者の顔写真】が貼られ

ているのに気がつく桜木。

桜木 「笑顔の生産者の写真を見て」……」

ホテルコパン・1階（夜）

フロントの中から、掃除をしている海人と、相変わらずラウンジで煙草を吸っているユリを盗み見している桜木。

海人 「ぼんやりと、掃除をして、あくびを殺し」……」

桜木 「(見て)……」

ユリ 「(無表情で煙草を吸って)……」

桜木 「(見て)……」

桜木、そんな二人を見ながら静かにパソコンを操作する。画面にはホテルコパンのホームページの更新画面が映り、制服姿でぼんやりと映る海人の顔写真と、同じく制服姿で無愛想に写るユリの写真を、スタッフ紹介として載せている桜木。



## 同・海人の住む部屋

それぞれの写真の下に【爽やかなナイスガイ！海人  
祐介、28歳です！ホテルコパンを包む美しい景色  
を、僕が案内したいな！】【ホテルコパンの紅一点、  
片山ユリです！お客様へ最上級のおもてなしを心が  
けています！笑顔が良いねって良く言われます。都  
会の疲れを癒しに、是非ホテルコパンへ！】と打ち  
込む桜木。

ユリは天井に向かい煙草の煙を吐いている。

桜木 「(出来上がり)…」

海人が私服に着替えている。

するとドアの隙間から桜木が覗いている。

海人 「…お疲れ様です」

桜木 「お疲れ」

海人 「(ずっと見られていて)…何ですか？」

10

山道  
(夜)

私服の海人が出て来る。  
煙草を吸いながら自転車に乗ったユリが帰って行く。

9

ホテルコパン・玄関  
(夜)

桜木 「お前、爽やかだな。良く見ると」  
海人 「…」  
桜木 「ナイスガイだよ、ナイスガイ。言ってみろ」  
海人 「…はい？」  
桜木 「『僕はナイスガイです』…はい、言ってみろ」  
海人 「…僕はナイスガイです」  
桜木 「(満足そうに)頑張ろうな、明日からも」  
海人 「…」  
桜木、『ニッ』と微笑み去って行く。

	14		13		12		11
海人が歩いている。	同・1階廊下 (夜)	海人が戻ってくる。	ホテルコパン・外観 (夜)	小さな居酒屋で、一人定食を食べている海人。	小さな田舎の居酒屋 (夜)	橋の上を歩く海人。川の流れる音だけが聞こえる。	橋の上 (夜)
							人通りの無い山道を歩く、海人。

## 同・海人の住む部屋

廊下の奥の角部屋に入っていく海人。

ホテルの空き部屋で住み込んでいる海人。

テレビを付けると、ニュースが流れてくる。

男キャスター「あの未曾有の大震災から、時が流れました」

復興の様子の子のドキュメント映像の断片が流れる。

海人 「(見て)…」

未だ進まぬ、瓦礫の跡。

港、仮設住宅、流された家の更地―。

海人 「(見て)…」

女キャスター「でも被災地の方々は立派ですよ。あれだけの苦

難に会いながら、しっかりと笑顔を取り戻して頑張っ

ています」

男キャスター「本当ですよ。かえって我々の方が暗い顔してい

るばかりな気がします」

映像が、スタジオに戻る。

女キャスター「ほんとに。笑顔、勇氣、絆。凄いですよね」

海人「(テレビの音量を下げる)…」

男女のキャスターが、ガッツポーズをしながら何かを訴えかけている。

力強く握りしめた拳がアップで映し出される。

× × ×

(フラッシュバック)

男の拳が床に向かって振り下ろされる。

× × ×

(海人の部屋。戻り)

海人「…」

テレビの光を受けた無表情な海人の顔。

部屋には時計の針の音だけが聞こえる。

太陽に包まれている早朝のホテルコパン。

ラウンジで朝食を食べている美紀と斑目。

美紀 「こういう所来るとき、不思議と朝ご飯一杯食べれちゃうんだよね！普段はさ、朝ご飯なんて食べたらウエ〜ってなるのに。何でだろうね！考ちゃん！？」

斑目 「(優しく)空気が美味しいからかな」

美紀 「ピンポン！正解です！美紀のソーセージを上げます！」  
自分の皿から、斑目の皿にソーセージを乗せる美紀。

斑目 「(笑顔で)お腹一杯だよ」

美紀 「どこ行こっか？ホテルの近くの山林コースが綺麗なんだって。美紀そこ行きたい」

斑目 「(微笑み)美紀が行きたいなら良いよ。行こっか」

美紀 「やったー！」

美紀、斑目の顔をデジカメで撮る。

そこに桜木が現れ、

桜木 「お早うございます。昨夜はゆっくりにお休みになれましたか？」

美紀 「はい！美紀自分の枕じゃないと寝れない派なんですけど、昨日はぐっすりです！孝ちゃんもいたし！」

桜木 「そうですね、それは良かった。今日はどちらへ？」

美紀 「山林コース連れてってくれるんだって！孝ちゃんが」

桜木 「良いですね。今の時期は紅葉が綺麗ですからねー。でも宜しかったらあそこ(窓の外に見える白馬ジャンプ台を指し)あそこにも行って頂きたい」

斑目 「何ですか、あれ？」

桜木 「(誇らしげに)白馬ジャンプ台です」

美紀 「？」

桜木 「1998年長野オリンピック。原田率いる日本ジャンプ陣が奇跡の金メダルを取ったあのジャンプ台です！」

斑目 「ああ」

美紀 「何それ、美紀知らない！」

頬を膨らませ、プンとした顔を見せる美紀。

桜木

「…あのですね、原田、舟木、岡部、斉藤という今考え

ても日本最強のジャンプ陣でございまして、当時は

日の丸飛行隊何て呼ばれてましてね、それはそれは

盛り上がりまして、こちら辺のホテルなんてお客様

と報道陣で一杯に…」

熱く語る桜木の話が聞いている、美紀と斑目。

フロントに向かう、一人の男「段来示(43)。

同・フロント

海人のいるフロントに、段がやって来る。

ラウンジで熱く語る桜木が見えている。

海人

「お早うございます」

段、502号室の鍵を預け、

段

「12時ちょうどにステーキ2人前、ビーフストログノフ

2人前、後コーヒーマも二つ持ってきてくれ。後替えのシ



「ツも」

海人 「かしこまりました」

段 「それまでには戻るから」

海人 「行ってらっしゃいませ」

ホテルから出て行く、段。

桜木が、まだ熱く語っているのが見える。

同・ホテル前

歩いていた段が、立ち止まりホテルを見上げる。

すると502号室の窓のカーテンが少し開き、一人

の女が見える「大崎ひかる(26)。

ひかるは生気の無い顔で、段を見つめる。

段は微笑みながら首を振ると、胸に手を当て、祈る

様に目を閉じる。

ひかる 「(同じように、祈り)…」

目を開けたひかる、安心したように段を見つめ、

	20	<p>白馬の山々</p> <p>ゆつくりとカーテンを閉じる。 それを確認し、再び歩き出す段。</p>
21	<p>神社（昼）</p> <p>白馬の山々の、美しい景色。</p>	<p>神社の階段を登りながら話す、美紀と斑目。</p> <p>美紀 「さて孝ちゃんに問題です。今日で私たちは付き合っただれ位になるでしょうか!？」</p> <p>斑目 「え?(考え)…」</p> <p>美紀 「ブブー!時間切れ!正解は74日と9時間:(腕時計を見て)3分でしたー」</p> <p>斑目 「(微笑み)細かつ」</p> <p>美紀 「嬉しかったなー、孝ちゃんが付き合ってくれてるって言う</p>

てくれた時」

斑目 「(微笑み)」

美紀 「美紀なんてさー、(指で数えながら)中学もろくに出てないでしょ？頭悪いでしょ？一回マニキュア盗んで補導もされちゃったでしょ？親とかも良く知らないでしょ？不安だったよー、孝ちゃんの相手がこんな私で良かったのかなーって」

賽銭箱に、小銭を入れる斑目。

美紀も真似て、小銭を投げる。

斑目 「(手を合わせ、目を閉じ微笑み)俺だって似たようなもんだよ。美紀だけじゃない」

美紀 「(手を合わせ)孝ちゃんに恥じない、立派なお嫁さんになります様に」

斑目 「(微笑み)お、結婚宣言だ」

美紀 「このままが、ずっと続くと良いね」

斑目 「(微笑み)続くよ」

美紀、微笑む斑目の顔を、デジカメで撮る。

22	<p>美紀 「満面の笑みで斑目を見て」</p> <p>斑目 「(微笑み)」</p> <p>二人手を繋いで、神社を歩いていく。</p> <p>東京の街中の道 (夕)</p>
23	<p>同・居間 (夜)</p> <p>テレビからはバラエティー番組の笑い声が聞こえる。テーブルの上で、総菜を皿に移すことなく、プラスチックケースのまま食べている千里。その表情は曇っている。部屋の間には仏壇が見え、その前には旅行のトランクケースが置いてある。テーブルの上に</p>

は、古びたノートパソコン。

惣菜を口に運びながら、携帯を弄る千里。

千里 「…(誰かに電話を掛ける)」

すると、居間と連結した隣の部屋から電話の着信音が聞こえる。やがて留守番電話になり、

千里 「…母さん、少し旅行行ってくるから。3日…4日…」

開けられることの無い、隣の部屋の襖。

ホテルコパン・一階 (朝)

海人はラウンジのテーブルを拭き掃除している。

フロントの中にいる桜木がパソコンを見て、

桜木 「やった、やった、やった、海人！お客さん予約入った！」

海人 「…」

桜木 「二人組のお客さん一組！独り旅の女性客一人！やっぱりお前が爽やかなお陰かなー」

海人 「…はい？」

桜木 「悦に入り独り言」…久しぶりだな、こんなにお客さん…

ホテルはやっぱり盛り上がりすぎてないとな」

そこにシーツを抱えたユリが通りかかり、

ユリ 「(桜木に)ねえ…ねえ」

桜木 「(ニコニコしながらパソコンを見つめ)…」

ユリ 「502の客変なんだけど。部屋掃除させてくんないし」

桜木 「(話半分でニコニコとパソコンを見て)…ええ？良いよ」

ユリ 「不倫カップルなんかでき、薬でも飲まれて死なれても

困るし(海人に)…あんた行ってきなよ」

海人 「別に問題ないんだろ？大丈夫だよ」

ユリ 「汚されて後で掃除すんのあたしなんだよ。行って来てよ」

立ち去るユリ。

海人 「…」

海人が力無く、ドアをノックする。

部屋の中からは、反応が無い。

海人が再び、ドアをノックしようとする。

しかし、ためらい手を止める海人。

部屋の中は、異様な静けさでシーンとしている。

海人 「…」

海人の呼吸が、少し乱れて来る。

強引に唾を飲み込み、呼吸を整える海人。

部屋を確認することなく、踵を返していく。

同・502号室の中

段 「(ドアの覗き穴に顔を近づけ、廊下を覗いている)…」

海人が居なくなつたのを確認し、ベッドに近づく。

ベッドの上では、やつれた頬のひかるが、ぼんやり

と段を見つめている。

まるで洗脳されている表情。

ひかる 「…先生？」

段 「囁くように)何も心配ない」

段、ひかるの頬を触れずに両手で包むと、その【気】  
を感じる様にうっとり瞳を閉じるひかる。

ひかる 「…」

段 「…穢れを落としたいか？」

ひかる 「…はい」

段 「今までの魂を捨ててまで？」

ひかる 「(頷き、涙が零れ出す)…真の幸福が欲しいだけです…も  
うあの家には帰りたくありません」

段 「(気を送り)…続けて」

ひかる 「…父と母は…私に物を与えるだけです…外の世界を見る  
事も許されず、鳥籠の中に閉じ込め…綺麗な物しか見る  
など言う…」

部屋に置かれたひかるのバッグや貴重品は、どれも  
上品ながら高価な代物。

段 「…大罪だ。穢れを落とさなさい」

ひかる 「(涙を零し、頷き)…」



28	<p>同・厨房</p> <p>ユリがくわえ煙草のまま、器用にフライパンを振っている。その手さばきは、さり気なく上手い。</p> <p>ユリ 「どうだった」</p> <p>海人 「別に平気だよ。部屋も汚れてなさそうだったし」</p> <p>ユリ 「ちゃんと見たわけ？」</p>
27	<p>同・一階</p> <p>段、ひかるのこめかみを親指で押しながら念仏を唱え始める。</p> <p>それに続いて、ひかるも念仏を唱え始める。</p> <p>閉じられたカーテンからの木漏れ日が二人に刺さる。</p>

海人 「見たよ」

ユリ 「ふくん」

ユリ、ふんわりとしたオムライスを皿に載せる。  
それを持ち、出て行く海人。

同・一階

ラウンジにオムライスを運ぶ海人の姿が見える。

フロントには、帽子を深く被った舟木曜子(70)と、

付き人の澤井善(30)がチェックインしている。

桜木 「満面の笑みで」いらっしやいませ」

代表で宿帳に記入している澤井。

澤井の後ろに立つ舟木に微笑む、桜木。

舟木 「(答えず)…」

桜木 「…」

澤井 「(書き終り)お願いします」

エレベーターから桜木、舟木、澤井が降りて来る。

舟木は歩き方に、老いの気配を感じる。

桜木 「(上機嫌に)良い天気で良かったですね。ご観光ですか？」

舟木 「(不機嫌そうに、無視して)…」

澤井 「ちよつと仕事で」

桜木 「お仕事ですか！？同部屋だから親子かと思いましたよ！遠いところまで御苦労さまです。どのようなお仕事で？」

舟木 「(不機嫌そうに、チラッと澤井を見て)」

澤井 「…あの、色々」

桜木 「そうですね、お忙しそうですね。でもお仕事の合間にお部屋から見える美しい景色を見て、どうぞくつろがれて下さい。507号室からはあの有名な白馬ジャンプ台が、」

舟木 「(澤井を見て、溜息を付き)」

32	<p>同・露天風呂 (昼)</p> <p>舟木 「(見て) ……」</p> <p>美し過ぎる白馬の山々。そして白馬ジャンプ台。</p> <p>舟木、不機嫌そうに窓の外を見ている。</p> <p>出していく。</p> <p>澤井が舟木の鞆から荷物を取り出し、ベッドの上に出していく。</p>
31	<p>同・507号室</p> <p>澤井 「(桜木に) 有難うございました。ここで大丈夫ですから」</p> <p>桜木 「…」</p> <p>澤井 「あの…鍵を」</p> <p>桜木 「(渡し) 失礼致しました。どうぞごゆっくり」</p> <p>澤井が部屋の鍵を開け、舟木が入って行く。</p> <p>澤井、桜木に頭を下げて部屋に入って行く。</p> <p>桜木、物足りなさそうに踵を返す。</p>

34	<p>同・娯楽室</p> <p>昭和の雰囲気のあるゲーム機があるスペース。 桜木が古いアーケードゲームをしている。 そこに海人がやって来て、珍しく語気を強め、</p> <p>海人 「桜木さん！」 桜木 「…何だよ」</p> <p>海人、桜木の腕を無言で掴み、連れ出して行く。</p>
33	<p>同・廊下</p> <p>海人が露天風呂のある床を、ブラシで磨いている。 そこにやって来る、相変わらず無愛想なユリ。</p> <p>ユリ 「…ちよっと」 海人 「…」</p> <p>足早に歩く海人。</p>

桜木 「ちよつと…何？海人…何!？」

同・フロント

怒られた桜木がパソコンの前に立っている。

桜木 「……」

画面にはホームページの海人とユリの写真。

ユリと海人、桜木の脇に立ち、

海人 「何ですか、これ？」

桜木 「…」

海人 「何で勝手に写真とか載せるんですか？」

桜木 「…野菜が」

海人 「野菜？」

桜木 「野菜がこうやって売ってたんだよ！どうにかお客さん戻したいの！賑わってた頃のホテルに戻したいの！その為にはまずお客様との信頼感だよ！絆だよ、絆、！今の時代こつち側の顔もちゃんと見せて、より信頼して貰わない

と！」

海人 「…」

桜木 「(予約表の高井千里の名を指し、海人に) ほら！女性の一人旅だって入ったんだよ！予約理由見てみるよ、『ホームページを見て』だよ？お前の爽やかな笑顔のお陰かもよ！有難う海人！(両手を上げ万歳して)万歳ー！万歳ー！」

ユリ 「(煙草を吸いながら、写真を指差し) 爽やかに笑ってないじゃん。野菜と私たち一緒にすんなよ」

桜木 「野菜が煙草吸うかよ！…消せよ煙草！」

ユリ 「(消さず)…」

海人 「…いつからですか？これ載せたの？」

桜木 「ちよつと前だよ」

海人 「すぐ消して下さい。僕は今のままのホテルが好きです」

桜木 「…今のままで良い訳ないだろ？何言ってるんだよ」

海人 「…良いんです、このままが」

桜木 「良くないよ！良くないんだよ！ホテルは賑わってないと

！」

真剣な表情で訴える、桜木。

海人 「…」

桜木 「…分かったよ。消すよ」

ユリ、それを聞いて厨房へ戻る。

桜木はしぶしぶパソコンを操作し始める。

そこへ、入口から女性が入って来る。

海人 「いらっしやい…」

トランクケースを引いた千里がフロントに来る。

海人 「…」

桜木 「(切り替え) いらっしやいませ！高井千里様ですか？」

千里 「はい」

海人、呆然と千里を見つめている。

桜木 「(小声で) 海人：海人！」

海人、宿帳を千里に差し出す。

無言で記入していく千里。

桜木 「道、迷われませんでしたか？」



千里 「はい」

桜木 「御宿泊日数は？」

千里 「…まだ決めてません。結構いると思います」

海人 「…」

桜木 「(嬉しく) そうですね！でしたらどうぞゆっくりして  
いって下さい！良いところたくさんありますから！山林  
コースに白馬ジャンプ台。美味しいソバ：山林コースに  
白馬ジャンプ台、美味しいソバ：ええと…(それ以上無  
く)」

千里 「(宿帳を書き終わり)」

桜木 「(部屋の鍵を出し) ほら、爽やかな海人。ご案内して」

海人 「…」

同・4階

廊下を歩いている、海人と千里。

海人は信じられない表情で、ただ前を向き歩く。

カーテンを開ける海人。

海人 「…」

千里は無言で、荷をほどいている。

海人 「…ご、ご用件があれば」

千里 「爽やかなんですか」

海人 「…」

千里 「人一人殺してるのに」

海人の呼吸が、乱れ始める。

海人 「ご、ご用件は…そちらの電話でお申し付け下さい…失礼  
致します」

部屋を出て行こうとする、海人。

千里 「宜しく願います。先生」

重い空気が部屋に流れる。出て行く海人。

千里 「…」

38	<p>同・エレベーター中</p> <p>エレベーターの階数表示が【4…3…2…】と下つて行く。</p> <p>息苦しい表情になる、海人。</p> <p>海人、必死にポケットを探り始める。</p> <p>ポケットから、小さな紙袋を取り出す。</p>
39	<p>同・ホテルの中の男子トイレ・外</p> <p>『ハ、ハ、ハ…』と短く苦しそうな呼吸音が聞こえる。</p>
40	<p>同・男子トイレ中</p> <p>小さな紙袋に口を入れて、過呼吸を落ち着かせている海人。</p>

携帯用の加湿器から出る蒸気で、喉を保温している

舟木。澤井は、部屋の片隅に立っている。

舟木 「(蒸気を喉に入れながら発声し) …ア、ア、ア、ア」

澤井 「…」

舟木 「ア、ア、ア、(伸ばし)アー…」

舟木の伸びやかな声が部屋に広がる。

窓の外の鳥たちが、一斉に飛び立つ。

やがて、蒸気が止まると、加湿器を片づける澤井。

舟木 「良い所ね、案外」

澤井 「(加湿器をタオルで拭いたりしながら)はい」

舟木 「白馬村か。初めてだわ、ここは」

澤井 「はい」

舟木 「台本まだ届かないの？台詞覚えたいんだけど」

澤井 「先程助監督から連絡有りました、撮影一日伸びた様で、

すみません」

舟木 「え？」

澤井、舟木用に蜂蜜をお湯で溶かしながら、

澤井 「それに監督が直接現場で先生とお会いしてから、そのイメージで台詞付けたいとか言い出してるみたいで」

舟木 「…生意気だね、最近の若い監督は」

澤井 「茶を渡し」

舟木 「(飲み)…」

しばしの間。澤井は黙って舟木の側に立っている。

澤井 「先生、お食事は？」

舟木 「(発声練習を始め)あ、え、い、う、え、お、あ、お…」

澤井、邪魔をしないよう頭を下げ部屋を出て行く。

同・一階 (夕)

ラウンジでは別々のテーブルに、美紀と斑目、澤井、千里が座っている。

その様子をフロントから見ている、海人と桜木。

## 海人の部屋 (夜)

桜木 「…まるで最盛期みたいだ。いや、まだ足りないなあ」

海人 「…」

桜木 「どうすればもっと東京とかからお客さん来ると思う？海人東京の人でしょ？何かアイディア頂戴よ」

海人 「…分かんないです」

桜木 「もっと考えろよ！楽しいんだぞ、賑わってるホテルは活気があって！」

千里 「(ラウンジから)すいません」

桜木 「はい！」

千里 「(ジッと海人だけを見て)…コーヒーお代り下さい」

海人 「…」

厨房に歩いて行く海人と、一人満足そうな桜木。

裸でベッドに横たわり、ぼんやりと天井を見上げて  
いる海人。

脇では裸のユリが、服を着始めている。

ユリ 「着ながら普通に」またイケないんだ、あんた。大変だね」

海人 「…」

ユリ 「死人みたい」

時計の針の音だけが聞こえる。

真っ白な、天井。

真っ白なホテルの天井から、教室の天井に変わる。

女生徒たちの悲鳴が聞こえると、男子生徒（14）が

殴られ床に倒れる。

その生徒の上にまたがり、拳を振り落す、男の手、が

映る。

男の拳は何発も何発も生徒の顔を殴り、やがて生徒

の顔は血塗れになっていく。

生徒、殴られながら、殴る男、を見つめている

が、やがて失神する。

それでも殴り続ける、男の手。

その男は、教師時代の海人(26)。

海人 「殴りながらいい加減にしろ！いい加減にしろお前は！」

女子生徒の悲鳴の中、殴り続ける海人。

窓から、花が咲いていない桜の木が見える。

45  
海人の部屋

ベッドの上で横たわりながら目を覚ましている、

海人。ユリは、もう居ない。

海人 「(無表情で天井を見ながら、呼吸が乱れてきて)…」

静かに紙袋を取り、口に当てる。

46  
色々な白馬の夜の風景

暗闇の中の白馬の山々。そして点在する、いくつもの



の寂しげなホテルやペンション。

客の余りいない、居酒屋。

桜木と川相が飲んでいる。かなり酔っている二人。

桜木のグラスに、焼酎を注ぐ川相。

川相 「おら！飲め！飲め桜木！」

桜木 「飲んでるよ〜」

川相 「飲んでない。お前は、の、ん、で、な、い」

桜木の頬に、キスする川相。

桜木 「汚えなー！（店主に）お新香頂戴」

おしぼりで顔を拭く、桜木。

川相 「…丸さんとこ、一千万だってよ、一千万」

桜木 「…そうか」

川相 「安く買い叩きやがって、中国人が…買うだけ買ってよ、すぐに転売しちゃうんだって！せめてホテル続けろっつ

一の」

桜木 「投資目的なんだよ、アイツらは。ま、売れただけ良かったじゃないか」

川相 「…ここ出てくってよ、丸さん…」

桜木 「…(頷き)」

川相 「娘さん、いくつになったっけ？」

桜木 「ん？ああ…9歳」

川相 「(溜息を付き)ハア…みんなそうだ。銀行から煽られて、ペンション、ホテルに変えて、借金して借金して…ホテル出来上がったと思ったら、良い時はあん時だけだ。(立ち上がり、スキージャンプで飛ぶ姿勢をして)行け行け行け…」

桜木 「(笑って)ハハハ…でも俺はな、取り戻すよ」

川相 「(ジャンプの姿勢のまま)何を」

桜木 「(立ち上がり、川相と同じくスキージャンプの姿勢になり)もう一回、あん時みたいに活気あるホテルに盛り返しゃな、色んなもんが戻ってくんだよ！」

49	<p>同・一階</p>
48	<p>ホテルコパン・外観（朝）</p>

川相 「色んなものって、何が!？」

桜木 「…幸せだ!」

ジャンプの姿勢のまま、力強く声を張り上げる桜木。

ジャンプの姿勢のまま、桜木を見つめる川相。

ペアジャンプのような二人、宙を見つめて笑い合う。

無意味に笑顔を作り、フロントに立っている桜木。

海人は、ぼんやりと掃除をしている。

桜木が胸に赤い花の形をしたブローチを付けている。

桜木 「海人、見ろ」

海人 「(見て)…」

桜木 「良いだろ、花のブローチ。洒落乙だ。(笑顔で)ゲン担ぎ

だよ。(後ろの写真を指し)この時期付けてたんだ。ずつ

と」

海人 「…(掃除にもどる)」

桜木 「盛り上げなきやな、もう一回。海人にも、幸せの御裾分け(笑って)ハハハ」

そこに、舟木と澤井が歩いて来る。

桜木 「(満面の笑みを作り)お早うございます」

舟木は、挨拶を返す事なくホテルから出て行く。

澤井 「(フロントに来て)明日の昼にFAX届くと思うのでお願いします。取りに来ますから」

桜木 「かしこまりました」

鍵を預け、足早に舟木を追いかけて行く澤井。

桜木 「(満足そうに呟く)…盛り上がってきたなあ、何か」

黙って掃除を続ける、海人。

ラウンジから、ジッと海人を見つめている千里。

川が流れる散歩道を歩く、舟木と澤井。

舟木 「良い天気だね」

澤井 「はい」

舟木 「お前、私に付いて何年になる？」

澤井 「二年とちよつとです」

舟木 「そうか、もうそんなになるか」

澤井 「はい」

舟木 「どうなんだ、自分の方は」

澤井 「はい？」

舟木 「芝居。芝居はしてるのか」

澤井 「ああ：来月、舞台やらせて頂きます。仲間と、自主公演

みたいなもんですけど」

舟木 「舞台か：良いじゃないの。今の若い俳優みたいに上っ面

の芝居を覚えたら駄目よ。きちんと心で演じる事を覚え

なさい。それが何より、良い俳優になる近道だから」

澤井 「有難うございます」

舟木 「遠回りに見えても、その方が良い」

53	<p>同・修業部屋く部屋の外</p> <p>修業部屋には、5名の信者が白装束の格好で胡坐を</p>
52	<p>森の中のイチジクの会、教団集落</p> <p>玄関には【イチジクの会】と看板が立てられている。</p>
51	<p>ホテルコパン・玄関前</p> <p>段が携帯で誰かと話している。</p> <p>相手はイチジクの会教団信者、糸井麻子(30)。</p> <p>段 「…何なんだ一体。折状中だと言ってるだろ」</p> <p>麻子(声) 「…一回戻ってきて頂けませんか？」</p> <p>段 「…どうした」</p> <p>歩き続ける、二人。</p>

組み念仏を唱えている。

その部屋の外への扉口で話している、麻子。

麻子 「また脱会者が出ました。3名です。他の信者には信心が

足らぬから先生が追い出したと言っております」

段 「…」

麻子 「お顔見せて頂きませんと、信者たちも動揺しますし…そ

れに…金融会社からの督促状も溜まっています」

× × ×

教団内にある、段の部屋。

段の書籍の大きなポスターが何枚も貼ってある。

× × ×

信者たちが使う部屋。

改築されて新しいが、使った気配がない。

× × ×

麻子 「(心配そうに)先生、もう一度、」

ホテルコパン・玄関前

55	<p>段 「金なら何とかすると言ってるだろ！」</p> <p>麻子(声) 「いえ、そうではなく…」</p> <p>段 「また現世の悪い癖が出てきたのか？麻子、地獄に落ちるぞ、地獄に落ちるぞ、地獄に落ちるぞ！」</p> <p>麻子(声) 「すみません」</p> <p>段 「祈りなさい！(念仏)○○…」</p> <p>電話を切る、段。</p> <p>イチジクの会・修業部屋・外</p>
56	<p>ホテルコパン・507号室</p> <p>舟木と澤井が帰って来る。</p> <p>澤井 「お昼どうされますか？」</p> <p>舟木 「適当にやるから、食べて来なさい」</p> <p>麻子、切られた電話を見つめている。</p>



澤井 「分かりました。何かありましたら電話下さい」

舟木 「うん」

澤井、部屋から出て行く。

舟木、ベッドに一人腰かけると、一匹の小さな蜜蜂が部屋の中を飛んでいるのを見つける。

舟木 「飛ぶ蜂を見て」

舟木、ゆっくりと立ち上がり、窓を開ける。

舟木 「逃がしてやろうと」

それでも外に逃げず、蜜蜂は部屋の壁に止まる。

舟木 「それを見て、少し微笑み」：ここが良いのか」

舟木、窓を少し開けたままベッドに腰を下ろす。

同・一階

ラウンジのテーブルで、ひかるが座ってコーヒーを飲んでいる。

ひかる 「外の景色をぼんやりと見て」

海人、空になったひかるのグラスに水を注ぐ。

ひかる「綺麗ですね。余計なものが流されるみたい」

海人「…ええ」

一階の柱の陰から、段がひかるの様子を見ている。

段「(ひかるを見て、ホッとした様に)…」

部屋へと戻る、段。

別のテーブルへやってきて座る澤井、桜木が注文を取りに行く。

別のテーブルで、美紀と斑目が座っている。

美紀「…ねえ、重大発表があるの」

斑目「何？」

美紀、何かを言いたそうに困った顔をしている。

斑目「(優しく)良いよ、何でも言って」

美紀「(真剣に困りながら)いつもので良い？」

斑目「(微笑み、頷き)」

美紀と斑目、それぞれの携帯を持つ。

それぞれに、ラインの画面にする二人。

美紀・文「元気？」

斑目・文「元気だよ」

美紀・文「旅行楽しい？」

斑目・文「楽しいよ」

美紀・文「無理行って旅行させてごめんね」

斑目・文「ほら、また悪い癖。悪くもないのにすぐに謝らない」

美紀、斑目を見て安心したように微笑む。

その視線は、親を見る子供の様。

斑目「何でも言って平気だよ、俺には」

美紀、勇気を出して携帯に打ち込んでいく。

美紀・文「赤ちゃんが出来ました」

斑目「(見て)…」

美紀・文「孝ちゃんの子。ごめんなさい」

斑目「…」

美紀・文「困るよね、孝ちゃん。こんなんじやずっと一緒じゃなくなっちゃうよね」

斑目、美紀を見つめる。

美紀、哀しそうな顔をしながら俯いている。

斑目、携帯に打ち込む。

斑目・文「そっか」

美紀・文「産んじや駄目だよね」

斑目「…駄目な訳ないじゃん」

美紀「…結婚とか、してくれるの？離れ離れとか、嫌だよ？」

斑目「(微笑み、頷き)」

美紀、泣き笑いの表情で斑目を見つめる。

それをこっそり背で聞いている桜木。

美紀「(大声で連呼して)やったー！孝ちゃん孝ちゃん孝ちゃん孝ちゃん孝ちゃん！」

子供の様に大喜びしている、美紀。

斑目は慣れた様子で優しく、美紀を見ている。

桜木「(澤井の肩に手を置き)：幸せが、生まれましたよ」

澤井「(困りながら)：あの、カレー早くお願いします」

フロントにいる海人の元に、403号室から内線が入る。しばしそれを見つめ、出る海人。

海人 「…はい。フロントです」

千里（声） 「…ちよつと、来て貰えませんか？」

海人が棒を使って、必死にベッドの下のイヤリング  
を取ろうとして、顔を突っ込んでいます。

それを無表情で見ている千里。

千里 「すみません。変なところ入っちゃって」

海人 「…いえ」

冷やかな視線で海人を見下ろしている。

千里 「気付きませんでした？ 予約表見て」

海人 「…名字が、お代りになっていたので」

千里 「離婚したんです。守が死んだ後、主人と」

海人 「…」

千里 「皮肉ですよ。中々離婚出来なかったのに、あの子が居  
なくなったらすぐ別れられました。あの子が離婚させて

くれたみたい」

海人、イヤリングを掴んでいるがベッドの下から出れない。

海人 「責めるなら責めて、早くお帰りになって下さい…申し訳ありませんが」

千里 「びっくりしましたよ。きちんと話したいなあって思ってたのに…まさかこんなところにね。インターネットって悪い物じゃありませんね。名前打てば、検索出来るんですから」

海人 「(小刻みに震え)…」

千里 「(窓の外の景色を見て)綺麗な景色見て、楽しいんですよ。爽やかに過ごしてらっしゃるようすし。全て忘れて、人生の再スタートですね、先生。私はあの日から、何一つ楽しくありません」

海人 「…」

千里 「先生、今、楽しいですか？生きてて」

海人 「楽しくありません」

千里 「じゃ、死ねば良いのに」

海人 「…」

千里 「…死ねば良いのに」

海人 「…」

千里 「(大声で、守が通っていた中学の校歌を歌い始める)♪輝く若葉と…」

ベッドの下で、苦しそうに目を閉じている海人。

千里、校歌を歌いながら海人を引きずり出す。

千里 「(海人の顔を睨みながら校歌を歌い続け)♪…」

海人 「…」

千里、応援団の様に拳を握り腕を振りながら、校歌を歌い続ける。

耐え切れず、部屋を出ていく海人。

千里 「…」

千里、歌い続けながら自分を責める様な苦しげな表情でベッドに腰掛ける。

59	<p>廊下</p> <p>苦しげな表情の海人が歩いている。      後ろの部屋からは、千里の歌う校歌が聞こえる。      海人、呼吸が苦しくなり紙袋をポケットから出し口      を突っ込む。</p>
60	<p>廊下</p> <p>海人 「(口を突っ込み)ハア、ハア、ハア、ハア、ハア……」</p>
61	<p>507号室・中</p> <p>舟木(声) 「ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア……」</p> <p>舟木が一人、発声練習をしている。      舟木 「ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア……」</p>



壁には、蜜蜂が止まっている。  
その声に、女の喘ぎ声が被る。

ひかる「(喘ぎ声)ア：ア：ア：ア：ア：ア：ア！」

舟木の声と被る様に、ひかるが段に抱かれ喘ぎ声を  
上げている。

段「(ゆっくりと腰を振りながら)：幸福に見えているもの  
は、真の幸福ではない」

ひかる「(頷き、感じ)：アア！」

抱きながら、ひかるに説法する段。

段「幸福は時に、目の前の真実の色を歪ませてしまう。青を  
赤に、赤を黒に、目の前にある景色を都合の良い色に変  
えてしまう：絶望しなさい。破滅しなさい。その後の困  
難な状況から見える貴方の景色こそが、真の幸福への扉  
です。絶望の中で手を取り合える誰かが、貴女の魂を癒

し明日へと導いてくれる」

ひかる「抱かれながら、涙を零す……」

ひかるを強く抱きしめる、段。

段「私を信じなさい。気を感じなさい……感じるか！」

ひかる「…ア！アア！」

ベッドの上でもつれ合う段とひかる。

502号室・前

ユリが台車にルームサービスを載せ、運んでくる。

部屋の中から聞こえる、ひかるの喘ぎ声。

段（声）「気を感じなさい……感じるか！」

ひかる（声）「ア！ア！…アア！…」

部屋の前に台車を置くと、煙草に火を付けるユリ。

ユリ「（煙を吐き出し）…アホクサ」

くわえ煙草で、踵を返すユリ。

64

一階・ラウンジ

桜木が、窓の外の白馬ジャンプ台を見つめている。

桜木 「…」

65

502号室・中

テーブルの上で、段が旨そうにステーキを食べている。

ひかるは、ベッドの中からボンヤリと段を見ている。

段 「肉を食べないと、魂は救えん…旨いな」

舌で肉汁を拭う、段。

段、ひかるの高級なバッグの中から財布を取り、中身を見る。

そこには札束と何枚ものクレジットカード。

段 「(見て)全てを投げうてるか？親も財産も。全てを捨てて私に付いてこれるか？」

ひかる 「…幸福は時に、真実を歪ませ、目の前にある景色を都合の良い自分の色に変えてしまう」

ひかるを見つめる、段。

段の見るひかるが歪み、色が幾重にも変わる。

段 「…」

ひかる 「どうしました？」

段の見る景色が、戻る。

段 「…私の力を、信じるか？」

ひかる 「…(頷く)」

段、部屋の隅に置かれた白い箱の中から、イチジクを取りひかるに渡す。

段 「入会を認める。お前は我が弟子だ。教団で修業しなさい」

ひかる、ゆつくりとイチジクをかじる。

やがて空腹から物凄い勢いでしゃぶりつく、ひかる。

段 「アダムとエバは裸の自分たちにイチジクの葉で衣を作り、キリストは実のならないイチジクの木を切り倒さず、実がなる様世話をし肥料を与えてたんだ。私がお前を育

66	<p>夜空・実景</p> <p>ててやる。全ての財産を教団に寄贈しなさい」</p> <p>ひかる「(むしやぶりつき、頷き)」</p> <p>段、窓から見える白馬の山の頂を指し、</p> <p>段「あの山の頂に、神が見えるか？」</p> <p>ひかる「(見て) …見えます。はっきりと見えます」</p> <p>段「…見えたか…(安堵したように) …良かった」</p>
67	<p>露天風呂 (夜)</p> <p>白馬村の夜空に月が浮かび、山を照らしている。</p> <p>千里が湯につかり、月を見ている。</p> <p>その湯に勢い良く入ってくる美紀。</p> <p>湯が千里に掛かり。</p> <p>美紀「ごめん！おばさん！あ、おばさんとか言っちゃった。ご」</p>

めんなさい」

千里 「(その物言いが、どこか憎めず) 良いわよ」

美紀 「あく! 気持ち良い!」

しばしの間。

美紀 「おばさん誰と来てんの? 旦那さん? 恋人?」

千里 「…一人」

美紀 「ウエ〜! 一人〜! ? お洒落だね、そういうの。あたしはね、(嬉しそうに) ダーリン、ダーリンと来てるの! それでね…おばさんにだけ教えてあげるね。結婚するの! あたし達!」

千里 「そう…おめでとう」

美紀 「優しいんだよ、孝ちゃん。美紀の全人生の中で出会った全人類の中で一番優しい! 美紀がどんな馬鹿なこと言っても笑ってくれるの!」

千里 「(無邪気さに微笑み)」

美紀 「子供出来たんだく、あたし! おばさんは? 子供いる?」

千里 「(少し考え、頷く) うん」

美紀 「いくつ？」

千里 「…16」

美紀 「男？女？どっち？」

千里 「男」

美紀 「そうなんだよ、ママの先輩だあ。ママ先輩だあ。大変な  
んだらうね、子供とか育てんのって」

千里 「…」

美紀 「あ、さつき孝ちゃんの写真撮るの忘れた。私ね、喜び  
写真コレクションってやってんの。嬉しいことあった  
時に写真撮んだ。おばさんも今度撮ってあげるね。美紀  
のコレクション入り」

千里と美紀、夜空を見上げる。

美紀 「ねえ？」

千里 「ん？」

美紀 「ふいに純粋な眼差しで千里の目を見て、  
『子供出来た』って言ったらさ、母親とか、父親とかつ  
て、喜ぶもんなのかな？」

千里 「…普通は喜ぶんじゃない？」

美紀 「ふくん。でもあたし知らないからなあ、親の顔。どこに居んのかも知らない！あ、孝ちゃんもそういう境遇なんだけどね。何かプチ虐待とか受けてたんだって！でももし親探して会ったりしてさ、『美紀、子供出来ました』なんて言ったら喜ぶのかな！？…面倒くさいか！そういうの」

微笑みの中に、微かな哀しみの宿る美紀の表情。

千里 「何か月？」

美紀 「3か月くらい！」

千里 「あんまり長湯しない方が良いわよ」

美紀 「は〜い。おばさ〜ん(頬を膨らませ)」

ブクブクと湯の中に潜っていきまう美紀。

千里、そんな美紀を見て少し微笑みを浮かべる。



ラウンジに、先に温泉から上がった斑目と、澤井が座っている。

そつと桜木が斑目の後ろに近づき、

桜木 「斑目様」

斑目 「はい」

桜木 「大変失礼ですけど…ご結婚、されるんですか？」

斑目 「え？」

桜木 「お昼に聞いてしまいました。(澤井を見て)この方と」

澤井 「(巻き込まれ)ええ？」

桜木 「おめでとうございます！いや、嬉しいです！当ホテルに旅行に来て頂いて、そこで将来を誓い合う！私そういうの待ってました。久しぶりです、こんなの！」

斑目 「(優しく微笑み)有難うございます」

桜木 「…白馬ジャンプ台へは、行かれましたか？」

斑目 「いえ、まだ」

桜木 「行けば良いのに！記念に！綺麗なんだから！」

斑目 「(微笑み、頷き)」

桜木、ふとフロントに飾ってある全盛期のホテルの  
写真を見て、

桜木 「(呟く) …結婚パーティーしましょう」

斑目 「はい？」

桜木 「結婚パーティー！このホテルで！せっかくだから！」

斑目 「良いですよ！」

桜木 「(聞かず)ご出発、明後日の夜ですよね？」

斑目 「はい」

桜木 「でしたら明後日の昼ここでやりましょう！他のお客様にもお声掛けして！お昼はね、白馬の山が一番綺麗に見える時間です！もちろん、パーティー代は当ホテルからのプレゼントです！」

斑目 「…いや、でも、そんなの申し訳ないですし」

桜木 「…空けといて下さいね。約束」

無理やり指切りをして、踵を返すハイテンションな  
桜木。

斑目と澤井、目を合わせて軽く頭を下げ合う。

69	<p>ホテルコパン・外観（夜）</p> <p>この映画のテーマ曲が流れ始めて。      疲れ切った表情の海人が帰って行く。      その横をくわえ煙草のユリが、自転車で帰って行く。</p>
70	<p>居酒屋・中（深夜）</p> <p>海人が一人、定食を食べている。</p>
71	<p>505号室（深夜）</p> <p>ダブルベッドで眠る、ひかる。      段は一人窓の外の山々に向かい、丹田の辺りで両手で空を包むように気を集め、立っている。      必死で、苦悶に満ちた段の表情。</p>

セミダブルのベッドで眠る、美紀と斑目。

美紀はべったりと斑目にしがみ付き、眠っている。

携帯で、美紀とのラインのやり取りを見ている斑目。

ライン・美紀の文「孝ちゃん、また怖い夢見ました。みんな顔が

無い」

文 「理不尽な事こそ、この世の真実だと思った。これ違う？

馬鹿な私なりの悟り(笑)」

文 「孝ちゃんが美紀を好きでいてくれるなら、あたし孝ちゃん

んが人殺しになっても私だけは守ってあげるのだ！これ

美紀だけの法律！」

文 「大好き大好き大好き！」

ナイトテーブルに携帯を置くと、斑目の肩から手首

に掛けてケロイド状にタダれているのが見える。斑

目、眠りにつく。

76	<p>403号室 (深夜)</p>	<p>誰もいないラウンジ。 桜木が座って、真っ暗な窓の外を見つめている。</p>	75	<p>ホテルコパン・ラウンジ (深夜)</p>	<p>ユリの父親が介護ベッドで眠っている。 寝たきりの父親の体をタオルで拭いているユリ。</p>	74	<p>ユリの実家・中 (深夜)</p>	<p>澤井 「(舟木に背を向けながら、眠れず) …」 シングルベッドでそれぞれ眠る、舟木と澤井。</p>	73	<p>402号室 (深夜)</p>
----	-----------------------	--	----	-----------------------------	--	----	-------------------------	--	----	-----------------------

77

海人の部屋  
(深夜)

小さなソファアームに座り、窓の外を見つめる千里。  
手には古いノートを持っている。

78

厨房  
(深夜)

テレビの中では、震災のドキュメンタリー映像が流れている。荒廃したままの土地の映像。復興できていないことへの不満と非難を述べる地元の人々。  
ベッドの上で膝を抱え、顔を膝に埋めて座っている  
海人。肩を震わせ、嗚咽している。

桜木が一人、パーティーの準備でしまっていた皿  
などをたくさん出している。

皿に巻いてあった古新聞を剥がし、ふと目を止める。  
その古新聞の小さな広告に【信ずれば君はいつでも

変わる　イチジクの会教祖・段来示】と段の顔写真入りの書籍の宣伝が載っている。

桜木　「(段の顔を見て) …」

映画のテーマ曲が終わる。

502号室・前　(深夜)

桜木が歩いて来る。

ドアの前に立ち、ノックする桜木。

桜木　「(ノックしながら) ……すみません…すみません…」

やがてドアが少し開き、眠そうな段が顔を出す。

段　「…何だ、こんな時間に」

桜木　「すみません。教祖様なんですよね？」

段　「…」

桜木　「教祖様なんですよ！イチジクの会っていうの！」

段、ドアを閉めようとするが、桜木が足を挟み防ぐ。

段　「…何なんだよ」

桜木 「どうすればこのホテルがもう一度盛り上がるでしょうか

？」

段 「え？」

桜木 「(じつと見て) …」

段 「(ドアを閉めようと)」

桜木 「(無理やりドアに顔を入れ) お願いします！教えて下さい

い！教えてくれないと駄目なんです！」

起きて来たひかるが、その様子を伺う。

段、桜木が付けている赤い花のブローチが目に入り、

段 「…ホテルの前に赤い花をたくさん植えなさい」

桜木 「(まっすぐに段を見て)」

段 「…そうすれば幸せがやって来る」

桜木 「(微笑み) …ありがとうございます」

【バン！】とドアを閉める段。

桜木 「(希望に微笑んで) …」



海人が橋の上から流れる川を見つめている。  
そこに桜木が通りかかる。

桜木 「(通り過ぎながら、笑顔で)花採ってくる」

暗い山道を、満面の笑顔で歩き去る桜木。

海人はずっと川を見つめている。

中学生たちの笑顔が見える。(回想)

中学校教室。休み時間。

教室の真ん中にポツンと立たされている、宮前守(14)。

他の生徒達がみな、クスクスと守を見て笑っている。

守の髪の毛が、半分刈られている。

すると男子生徒の児玉優斗(14)が呟く。

児玉 「…死ね」

児玉は、海人の夢の中で殴られていた生徒。

一斉に笑顔で『死ーね』とコールを始める生徒達。

守 「…」

そこに教師の海人が入って来る。

笑い声と死ねコールがピタリと止まる教室。

海人、思い切り児玉の頬を平手で殴り飛ばす。

吹っ飛ばす児玉。

海人 「生徒たちにいい加減にしろ、お前ら！」

児玉 「…」

守の元へ行く、海人。

他の生徒たち、海人に怯えるどころか、白けた目で

海人を見ている。

同・屋上（昼）

海人がバリカンで、守の髪を刈ってやっている。

二人、鏡越しに会話しながら。

海人 「(刈りながら)…何とかするからな、絶対」

守 「(微笑みながら)良いよ、先生」

海人 「良くないだろ」

守 「あんまり僕だけ守んない方が良くいよって言うてるの。見玉だってそれなりに悩んでんだから。思春期思春期」

海人 「何言ってるんだ」

守 「児玉ん家(ち)もさ、あんまり親上手くいってないんだって。小学校の時はさ、結構良い奴だったんだよ、あいつ」

海人 「：関係ない。だからって苛めて良いわけない」

守 「(微笑み)大人も子供も一緒、生きるって辛いんだよ。生きてるとき、いろんなことを望むじゃない？でも、ほんどのことは叶わないからね」

海人 「：何悟ってるんだよ、お前」

守 「でも生きてりゃさ、そのうち良い事あんのよ。一個くらい」

海人 「それ俺が言う言葉だよ」

優しく微笑む、守。

それにつられ、苦笑いする海人。

守 「それよりさ、約束守ってよね。頑張るから」

海人 「…ああ」

髪を丸刈りにし終わり、鏡を見る守。

守 「(丸刈りの自分を見て)案外似合うね。上手いじゃん先生、美容師になれば？」

海人 「…寒そうだ」

海人、自責の念の表情を浮かべる。

守 「さて問題です」

海人 「？」

守 「雪が溶けたら、何になるでしょうか？(秒数を数えるように)チキチキチキチキ…」

海人 「え？…(しばし考え)…水？」

守 「ブー。春だよ春。雪が溶けたら、春になるんだよ、先生」

海人 「…」

守 「(微笑み)春は来るから、誰にでも。だから大丈夫だよ」

守、鞆から一冊のノートを出し、海人に渡す。

校庭の、花が咲いていない桜の木を見る海人と守。

守 「今年咲くの遅いね」

海人 「ああ」

守 「桜の花ってさ、下向いて咲いてるの、知ってる？」

海人 「知らん。なんか春の花なのにネガティブだな」

守 「違うよ。桜はさ、桜なりに考えてさ、きつと桜を見る人たちが空を見上げられる様に下向いて咲いてくれてんだよ」

海人 「…なるほど。俺より教師っぽいな、お前」

守 「好きなんだ、桜」

海人 「(桜の木を見て)…早く咲かねえかな…早く来ねえかな、春」

桜の木を見つめる、海人と守。

どこかの通り (回想)

トラックの前に、飛び出してくる守。

守 「(何かを見て、微笑みながら足を踏み出す)…」

86	<p>ホテルコパン・外観（明け方）</p> <p>いくつものプランターに、山から抜いてきた様な赤</p>
85	<p>山の奥（深夜）</p> <p>月明かりの中、桜木が必死に赤い花を探している。        転びながらも、探し続ける。        赤い花がたくさん咲いているのを見つけ、歓喜する。</p>
84	<p>橋の上（深夜）</p> <p>守がトラックに跳ねられる、衝突音。</p> <p>海人がぼんやりと、川の向こうを見ている。        闇夜に紛れ、千里が立って海人を見つめている。        千里の手には、一冊の古びたノート。</p>

い花をたくさん植えている桜木。その顔は、泥だらけ。ホテルの周りは、赤い花のプランターで一杯になっっている。

桜木 「(満足そうに)ハア…ハア…」

同・一階 (昼)

フロントに、桜木が上機嫌で立っている。

澤井 「あの、FAXって来てないですか？」

桜木 「(上機嫌で)ちよっとお待ち下さいね。(フロントに入り)ありました。届いてますよ！」

FAX用紙を渡す桜木。

それはドラマの香盤表で、【村人・1 舟木曜子】と書かれている。

澤井 「(村人1を見て) ……」

桜木 「何ですか、それ？…え？ドラマ？撮影？」

澤井 「…まあ」

桜木 「ああ！舟木曜子って…いた！昔いた俳優さんだ！ねえ！」

澤井 「…ええ」

桜木 「あの俳優さんだったんだ。出てましたよね、昔、刑事物とか！気付かなかった…」

澤井 「あの、コピー機お借りして良いですか？」

桜木 「どうぞ、どうぞ！凄いな…俳優さん泊ってるよ。あの、

明日のパーティー、舟木さんも絶対誘って下さいね！」

澤井、コピー機近くでFAX用紙に何か書きながら、

澤井 「（書きながら）ええ」

桜木 「（微笑み、呟き）…凄いな、赤い花」

【村人・1】を【村人・しづ】とペンで書きなおし、  
ばれないようコピーをし直す澤井。

香盤表を手にとって見ている舟木。

澤井 「…」



舟木 「【村人・しづ】という役か」

澤井 「…はい」

舟木 「台本は？」

澤井 「あらずじはこの間説明した通りらしいので、身一つで来て下さいと」

舟木 「…」

澤井 「…」

舟木 「お茶出して」

澤井 「はい」

窓際に立つ舟木。緊張で手が震えている。

舟木 「(リラックスする様に、短く息を吐き)」

澤井 「(それを見て)…」

ホテルコパン裏・外 (昼)

人気の無いホテルの裏で、少し離れて並び煙草を吸っているユリと海人。

---

ぼんやりと白馬の山を眺めている二人。

ユリ 「…明日の昼パーティーするから用意してくれって」

海人 「…うん」

ユリ 「…煙草吸うんだ」

海人 「…ああ」

しばしの間。

ユリ 「する？」

海人 「（白馬の山を見ながら）…しない」

景色を見ながら、煙草を吸う二人。

ユリ、海人にキスをする。

海人、顔をそむける。

それでも強引にキスをする、ユリ。

海人 「やめろって！」

ユリ 「…」

千里が立って見ている。

海人 「…」

ユリ、煙草を地面に捨て、去って行く。

90	<p>山道 (昼)</p> <p>海人と千里が歩いている。 雄大な自然の中を、二人、黙って歩き続ける。</p>
91	<p>湖 (昼)</p> <p>美しい湖のほとりのベンチに座る、海人と千里。 千里 「(湖を見て)…もう2年です…あの子が死んで」 海人 「…」</p>

千里 「楽しそうな所すみません。ホテルの周り、観光したいんですけど」

海人 「…」

千里 「案内してくれるんですね、ホームページに書いてありました」

言い捨て、歩いていく千里。

千里 「綺麗なんでしょうね。普通に見たら」

海人、呼吸が荒くなり紙袋を取り出す。

口を突っ込もうとする、海人。

千里、紙袋を取り上げる。

海人 「(過呼吸)ハ、ハ、ハ…」

千里 「何でいなくなっただんですか？」

海人 「(過呼吸)ハ、ハ、ハ…」

千里 「見捨てて逃げるんなら、何で最初からあの子の事庇ったんですか！？何であの子が苛められてた事…私に教えてくれなかったんですか！」

海人 「(過呼吸)ハ、ハ、ハ…」

千里 「苛められてるの分かってたら、私何とか出来たかも知れない！私母親ですから！産みましたから！」

海人 「(過呼吸)」

千里 「何で、あの子を一人にしたんですか！」

海人 「(過呼吸)ハ、ハ、ハ…」

千里 「先生が殺したようなもんですよ！」

海人、どんどん呼吸が荒くなっていく。

千里、海人に掴みかかり、

千里 「キスして楽しいですか？あの子はキスをしたんでしょうか？そんな経験出来たんでしょうか？14歳、14歳ですよ！」

海人 「何も言えず、過呼吸）ハ、ハ、ハ…」

千里、狂った様に海人の唇にキスをする。

海人、拒否することも逃げる事も出来ない。

千里 「(キスを止め)…ハア…ハア…」

混乱している、千里。

海人 「…僕は…ハハ、逃げました」

千里 「(睨み)」

海人 「守は…ハ、ハ、僕が…殺したようなもんです」

荒い呼吸の海人を、睨み続ける千里。

中学校の教室 (回想・昼)

休み時間。

丸坊主の守が、裸の体を紐で縛られ立たされている。クラスメイト達が笑いながら携帯で写真を撮っている。

児玉 「泣けよ。何で泣かぬーんだよ手前は。気持ち悪いんだよ」

守 「泣けよ」

児玉 「泣けよ！」

そこへやって来る海人。

守に自分の上着を被せ、児玉の顔を拳で殴る海人。

女子生徒の悲鳴。

児玉が床に倒れる。

海人、児玉に馬乗りになる。

海人 「児玉！」

児玉 「(ニヤツと)あいつとデキてんですか。気持ち悪い。訴えますよ」

海人、児玉の顔に拳を振り落とす。

児玉 「効かないっす。あいつは苛め続けますよ」

海人、何発も何発も児玉を殴る。

守 「先生、駄目ー！」

海人、取り憑かれた様に殴り続ける。

児玉は海人を見たまま、血を流し気を失っていく。

女子生徒たちが他の先生を呼びに行く。

守 「(哀しく、見て)」

同・会議室 (別日・回想・昼)

PTAの役員達に罵声を浴びせられている、海人。

役員1 「一部の生徒をエコ最肩しているという話がー」

役員・女2 「苛められてるその子にも問題あるんじゃないー」

役員3 「貴方の行動が苛めを助長させてるんじゃないのか！」

役員4 「とにかく暴力は問題ですよ、問題！」

校長と教頭が、必死に頭を下げている。

海人 「でも教師が生徒守らないで、誰が守るんですか？」

再び一斉に罵声を浴びる、海人。  
ひたすら頭を下げている、校長と教頭。

## 同・廊下（回想・夕）

教頭と、海人が話している。

教頭 「依頼退職って事で勘弁してよ。君もまだ若いんだから、他の学校へ時期見てさ、ね？」

海人 「…」

教頭 「…何て言うか、何とかしたいという君の気持も分かるけどさ、ホラ、今何かとうるさいし」

海人 「…」

教頭 「PTAの言う事も一理あるんだよ。苛められてる側の肩持ちすぎると、余計火付けちやう場合もあるし。デリケートだよね、ほんと」

海人 「…」

教頭 「苛められてる生徒の名前…何だっけ？」



海人 「宮前守です」

教頭 「あ、その宮前君？こつちで何とか頑張るからさ、な」

海人の肩を叩き、困った様に去って行く教頭。

同・校庭（回想・夕）

学校を去ることになった海人が、校門に向かい歩いている。校門付近には、花の咲いていない桜の木。

海人 「（桜の木を見る）…」

視線を感じる、海人。

教室から、守が海人を見ている。

交換日記のノートを振って見せる、守。

海人 「来週までに書いとけよ！」

守 「（笑顔で頷き）…」

去って行く、海人。

守 「（その背を、見送り）…」

96

守の部屋 (回想・夜)

部屋着姿で机に向かっている守。  
真剣な顔で何かを書いている。

97

学校の前の道 (回想・夕)

私服姿の海人が、交換日記のノートを取りに歩いて来る。

海人 「(しかし、正門には入れず)…」

何人かの生徒が、海人の横を逆走して走り抜ける。

生徒1 「死んだってよ！」

生徒2 「マジで！」

生徒1 「トラックに飛び込んだって！」

海人 「…」

海人、慌てて踵を返し、走って行く。

どこかの道（回想・夕）

モンタージュ。

人だかり。

目隠し用のブルーシートの際間から見える守の足。

その光景を呆然と見つめる海人。

呼吸が、荒くなる。

海人 「（過呼吸になり）ハハハハハハ…」

その場にうずくまる海人。

湖（昼）

海人 「（過呼吸）ハ、ハ、ハ、ハ、すいません！すいません！すいません！」

千里 「…」

海人 「俺なら助けられるって…助けられるんだって」

千里 「…」

海人 「…でも何を…ハハ、どうすればいいのか…分からなくな  
った」

千里 「(睨み)」

海人 「ずっと…逃げてます…ハハ、ただ…生きてます…どうし  
たら良いかなんて、もうとづくに分かりません」

千里、鞆の中から小さなナイフを出し、渡す。

千里 「…どうぞ」

海人 「…」

海人、自分の首にナイフを当てる。

ボロボロと泣きながら、何度も首にナイフを刺そう  
とする海人。

しかし、刺せない。

千里 「あの子は何で自殺なんでしたんでしょうか？先生が居な  
くなつたから？私が至らなかつたから？分からないんで  
す、あたし。母親なのに」

海人、壊れた様に泣いている。

千里 「(湖を見て)…綺麗ですね」

海人の手から、静かにナイフを取る千里。

千里 「…明日はパーティーですって。オーナーさんから誘われちゃいました」

海人 「(泣き)…」

千里 「戻りましょう、先生」

泣きじゃくる、海人。

静かに湖を見つめる、千里。

道の駅・野菜売り場 (昼)

野菜を箱ごと買っていく桜木。

桜木 「人参も一箱貰おうかな」

川相 「景気良いなく。どうしたの？」

桜木 「(選びながら) パーティーだよ、パーティー」

川相 「パーティー？」

桜木 「料金はこっち持ちだけだね。サービス。言ったら、ホテルを盛り返すって。あ、ピーマンも頂戴」

野菜を選んでいく桜木。

軽トラの荷台に野菜を詰め込んでいく桜木。  
顔を上げると何かに気がつく。

桜木 「…」

そこには元妻の美智代（42）と娘（9）が立っている。

桜木 「…」

美智代 「お久しぶり」

桜木 「戻ったのか？」

美智代 「母の所に遊びに来ただけ」

桜木 「…そうか」

桜木、愛おしそうに娘を見る。

娘 「（桜木を見て）…」

美智代 「そんなの、まだ付けてたんだ」

桜木 「え？（胸に付けた花のブローチ見て）…ああ」

103	<p>走る軽トラ・車内（昼）</p> <p>この映画のテーマ曲が流れる中。 桜木が娘を助手席に乗せ運転している。 娘は、不安げな表情で桜木を見ている。</p>
102	<p>同・道の駅・野菜売り場（時間経過）</p> <p>美智代が野菜などを選んでいる。 ふと後ろを振り返ると、娘がいない。 美智代「…」</p> <p>美智代「（軽く頭を下げ）」 娘の手を引き、踵を返し歩いて行く美智代。 娘「誰？あの人？」 美智代「（笑顔で）昔のお友達」 その後ろ姿を、ずっと見ている桜木。</p>

106	<p>道の駅 (昼)</p> <p>桜木 「(歌い続け) ♪…」</p> <p>娘 「ママは？」</p> <p>桜木 「…」</p> <p>桜木、○○の歌を唄いだす。</p> <p>桜木 「♪(歌を続け)…知ってるかこれ！？君が小っちゃい頃流行ったんだ！」</p> <p>引き攣った笑顔で娘を見る、桜木。</p> <p>娘、声を上げ泣き出す。</p>	105	<p>どこかの道・軽トラ車内 (昼)</p> <p>美智代が半狂乱で娘を探している。</p>	104	<p>道の駅 (昼)</p>
-----	---	-----	--	-----	----------------



泣きながら美智代が電話している。  
傍には警官が2名立っている。

107

どこかの道・軽トラ車内（昼）

歌いながら運転する桜木と、泣き叫んでいる娘。  
窓から見える白馬ジャンプ台が、遠ざかって行く。

108

白馬ジャンプ台前・軽トラ車内（夕）

軽トラを止め、娘にジャンプ台を見せている桜木。  
娘は、『ママー！ママー！』と泣き続けている。  
桜木、ブローチを外し、娘に握らそうとする。  
でも娘は桜木の手を振りほどき狂った様に泣き叫ぶ。  
足元に落ちる、赤い花のブローチ。  
それを拾おうとするが、娘が足をジタバタさせて拾  
えない。

桜木 「…」

ブローチが、娘の足で踏みつけられていく。

道の駅 (夕)

桜木の軽トラが戻ってくる。

人だかりが出来ていて、美智代が軽トラに走ってくる。軽トラが停まり、娘が泣きながら降りてくる。

桜木 「…」

泣きじゃくる娘を抱く、美智代。

警官2名が運転席に走り、桜木を降ろそうとする。

桜木、一点を見つめたまま中々降りない。

やがて警官によって引きづり出される桜木。

街の人々 「(見て)…」

川相 「(呆然と見て)…」

桜木に近寄り、殴り飛ばす美智代の旦那。

桜木、地面に倒れ警官に手錠を掛けられる。

111	<p>桜木の家・外観（夜）</p> <p>ホテルコパンに隣接する小さな家。</p> <p>桜木（声）「…さあ、ここ長野県は白馬ジャンプ台。今、世紀の戦</p>	110	<p>白馬警察署・前（夜）</p> <p>娘 「（美智代に抱きつき、泣き続け）」</p> <p>旦那も娘の元に向かい、娘を抱きしめる。</p> <p>手錠を掛けられながら、ずっと娘を見続ける桜木。</p> <p>桜木 「…」</p> <p>映画のテーマ曲が、終わる。</p> <p>刑事 「向こう方が許してくれんかったら、誘拐罪だぞ、桜木さん」</p> <p>力無く頭を下げ、帰っていく桜木。</p>
-----	---	-----	--

## 同・中の居間（夜）

いが始まろうとしています」

畳には、空いた酒瓶が何本も転がっている。  
一人身の片付いていない部屋。

酒に酔った桜木が、アルバムを捲っている。

桜木 「捲りながら」：前回のオリンピックの屈辱を晴らせるの  
か、原田：しかし一回目のジャンプは失敗です」

するとテレビから、ニュースの声が聞こえる。

テレビのキャスター「2020年東京オリンピック決定！盛り上  
がりますよコレは！何度聞いてもこのニュースは」

桜木 「(テレビを消し)：」

アルバムの写真は、まだペンションを経営していた  
当時のもので、ペンションの前で仲良く写っている  
桜木と美智代などが写っていて、1996・7・2  
0などと年数が刻まれている。

---

次のページを捲ると、ケーキの前で桜木の誕生日を  
美智代が祝っている写真で、桜木が美智代から貰っ  
た花のブローチを、嬉しそうに見せびらかしている。

桜木

「(見て)：岡部、斉藤は見事なジャンプを見せました。こ  
こで原田：決められるか…」

アルバムを又捲ると、ペンションを改装したホテル  
コパンの前で幸せそうに笑っている、美智代との写  
真。桜木は胸に花のブローチを付けている。年数は  
1998・1・5と刻まれている。

桜木

「原田が決めれば、1998年この長野オリンピック金メ  
ダルが近づきます！」

アルバムを捲ると、オリンピックで賑わうホテルの  
様子が何枚も貼ってある。さらに捲ると、ホテルコ  
パンの玄関前で、美智代は赤子を抱き、桜木は胸に  
花のブローチを付けている。年数は2004・1・  
5と刻まれている。

しかし、捲れど捲れど、これ以降、アルバムには何

も写真が貼られていない。

桜木 「…」

桜木、すつと立ち上がると、原田選手になりきりジャンプの踏切で構える姿勢を取る。

淡々と、アナウンサーの実況を真似る桜木。

桜木

「さあ！原田！日本日の丸飛行隊の期待を背負いジャンプ台に着きます！風を見ている、風見ている原田！この一本に金メダルがかかっています！（姿勢を低くして、飛び出す格好）…飛んだ！原田飛んだ！これはどうだ！高い！高い！高いぞ！（着地の姿勢を取り）やったー！！原田やったー！！137メートルの大ジャンプ！ここ一番で咲かせた大輪の花！やった！やったぞ原田ー！…」

ガッツポーズしながら、笑顔を作る桜木。

白紙のアルバムが虚しく放置されている。

桜木 「…何も無いじゃないか…」

白馬村の、とある無人となったペンション街（夜）

114	<p>白馬の山（朝）</p> <p>太陽が白馬の山々を照らしている。</p> <p>桜木 「(大声で)：おーい！：おーい！」</p> <p>誰も居ないペンション街で、一人叫ぶ桜木。</p> <p>桜木 「(辺りを見回し)：おーい」</p> <p>静寂の中に、『おーい』の声が小さく木霊する。</p> <p>桜木 「(大声で)：おーい！：おーい！」</p> <p>誰も居ないペンション街で、一人叫ぶ桜木。</p>
115	<p>田んぼ・撮影現場（朝）</p> <p>撮影スタッフが慌ただしくセッティングしている。</p> <p>スタッフ1 「おい、早くレール持ってこいよ！時間ねーぞ！」</p> <p>スタッフ2 「すいません！」</p> <p>主演俳優は椅子に座り、手厚くもてなされている。</p>

端の方で、立って出番を待たされている舟木と、横に立つ澤井。

舟木 「黙ってまっすぐ立ち」

澤井 「…」

助監督 「(スタッフに)スタンバイ出来ました！」

舟木、撮影場所に歩いて行く。

助監督 「えー、ではシーン22撮影行います。その前に、えーつと、何だっけ(香盤表を見て、感情も無く)…村人1役、

舟木…囃子さんです」

おぎなりの、まばらな拍手のスタッフ。

舟木 「(きちんと頭を下げ)宜しくお願い致します」

澤井のした事を分かっていた、舟木。

澤井 「(見て)…」

舟木など見ずに、一斉に散らばるスタッフ。

助監督 「(主演俳優の佐竹に)佐竹さん！こちらお願いします！」

佐竹 「あいよ」

監督 「佐竹さんね、向こうから犯人追ってきた感じでバーつと



走って来て！バーっと！」

監督から指示を受けている佐竹。

舟木 「責める事無く、澤井を見て…」

澤井 「(舟木を見て)…」

舟木 「(少しだけ、笑みを浮かべ)」

澤井 「…」

舟木、ベテランらしく大体の位置に歩いて行き、

そこでじっと待つ。その姿を見続ける澤井。

監督 「(舟木に)えーっとお婆さんね、あんたは佐竹さんが来て

聞かれるから、『あっちです』って言って指差して。分

かる？ね？」

舟木 「はい」

監督 「本番行くぞ！」

散らばるスタッフ。

× × ×

監督がモニター前に座っている。

澤井は離れた所で、舟木を見ている。

監督 「…本番！ヨイ、ハイ！」

主演俳優の佐竹が走って来ると、田植えをしている舟木の前に立ち止まり、

佐竹 「(大根芝居で)黒い服着た男どっち行った！」

舟木 「あっちです」

それを聞き走って行く佐竹を、カメラが追っていく。カメラにも映っていないのに、きちんと芝居を続けている舟木。

澤井 「(それを見て)…」

監督 「カット、カット！ごめん佐竹ちゃん！もう一回やらせて！こつちの問題！」

佐竹 「ちよつと〜！勘弁してよ〜」

監督 「東京戻ったら奢るから！お願い！」

佐竹 「(わざと)高いよ、俺〜」

佐竹を、たくさんのスタッフが取り囲み、談笑しながらスタート位置へ戻って行く。

舟木、同じ位置で気持ちを切らさず、立っている。

澤井 「(舟木を見つめ)…」

市営バスの中 (午前)

撮影後の舟木と澤井が、市営バスに揺られている。

舟木 「…馬鹿だな、お前は」

澤井 「…」

舟木 「(優しく)気付いてないとも思ってたのか?え?」

澤井 「…すいません」

舟木 「エキストラみたいな役でも、ちゃんとやってくれればいいんだ。きちんとやるよ。俳優だから」

澤井 「…」

舟木 「優しすぎちゃ駄目。この仕事に向かない」

澤井 「…はい」

舟木 「…事務所、クビらしいね私。電話あったよ、昨日」

澤井 「…」

舟木 「全く。もう少し待てば自然と居なくなるのに、こんなお

婆ちゃん」

澤井 「…」

舟木 「昔は良かった。何本かヒット作に恵まれて、良い仲間がいて、撮影終わりやみんな飲んで…楽しかった」

澤井 「僕は…先生みたいになりたいです」

舟木 「…猫と暮らす孤独な老人だよ。馬鹿」

落ち込んでいる、澤井。

そんな澤井の背中を、『バン!』と叩く舟木。

舟木、澤井に微笑んでやる。

澤井も、何とか微笑もうとする。

田舎道を、二人を乗せたバスが走って行く。

ホテル・パーティー会場 (昼)

ホテルではパーティーが始まっている。

【浜名美紀さん&斑目孝介さん結婚記念パーティー】  
と垂れ幕が掛っている。

嬉しそうな美紀と、斑目が高砂に座っている。

ユリ、海人は脇に立っている。

いくつかのテーブル席には、何もなかった様に  
千里、段、ひかるが座っている。

司会の桜木が、無理にテンションを上げる様に、ア  
フロのカツラを被って司会のマイク前へと向かう。

しかし表情は、夢遊病者の様に感情が無い。

一同 「桜木を見て」

桜木 「壇上のマイクの前で）えー…では皆さん。只今より浜名

美紀さん、斑目孝介さんの…始めようと思います。イエ

イ…」

一同 「…(まばらな拍手)」

桜木、力無く頭を下げ、壇上を降りる。

一同、困惑のまばらな拍手。

桜木 「…海人、後、頼むわ」

海人 「え？」

桜木、少し離れた所に座ってしまう。

一同、桜木を見て、海人へ視線を向ける。

ユリ 「早くやんなよ。病気だよアレ」

海人の背を押し、マイクの前に立たせるユリ。

海人 「(マイクの前で) …あの …本日は、誠におめでとうござい  
ます」

一同 「(拍手)」

海人、千里が目線に入る。

千里は、黙って海人を見ている。

海人 「…ですが私は…お二人の幸せをお祝い出来るような人間  
ではなく…」

一同、海人を見つめる。

一同・千里 「…」

海人 「…私は、」

斑目 「あー、ちよつと待った！ストップ、ストップ！」

今度は一同、斑目を見る。

斑目 「あの一、なんか盛り上げ様としてくれるとこ悪いんす  
けど、…つつーか微妙な雰囲気だけ」

美紀 「…」

斑目 「パーティー中止にしてもらえませんか？」

美紀・一同 「斑目を見て」

斑目 「(美紀へ) ごめん、やっぱ無理、結婚」

美紀 「え？」

斑目 「ほんとはさ、東京帰ってから言おうと思ってたんだけど

…(桜木を見て)あの人、ほんとにやると思ってたなかったからさ」

桜木 「…」

美紀 「…」

斑目 「(一同に)大体ね、誰の子か分かんないんすよ？ガキ出来たって言ったって。(半笑いで)こいつ、すぐ誰とでもヤツちやうんで」

美紀 「孝ちゃん」

斑目 「誰の子よ？前の彼氏？バイトの居酒屋の店長？それとも俺みたいにネットで知り合った奴？」

美紀 「…」

美紀、慌てて携帯を出し、ラインをしようとする。

斑目 「重いんだよ。普通に話せよ、何でラインなんだよ。愛情を知らない？(ニヤニヤ笑い)知らねーよ、俺まで一緒にすんなよ」

美紀 「…」

斑目 「俺さ、お袋とは色々あったけどさ、実は今そこそこ上手くやっつてんのよ…お前みたいに昔の事引きづりながら生きてないわけ。ごめんな、なんか誤解させちゃったみたいで。悪い悪い」

斑目、立ち上がりエレベーターへと向かう。

美紀 「孝ちゃん！」

必死に後を追う、美紀。

立ち止まる、斑目。

斑目 「何かさ、お前可愛そうじゃん。痛くて」

美紀 「…」

斑目 「可愛そうな奴守ってるとき、一瞬気持ち良かった」

斑目、言葉とは裏腹に瞳には涙が浮かんでいる。



それに気付き、無理に爽やかに微笑む、斑目。

美紀 「…」

歩き出す斑目に、必死にすがり付く美紀。

振りほどかれ床に倒れながら、斑目の足にしがみ付き引きずられる美紀。

美紀

「行かないで！行かないで！ごめん！ごめん孝ちゃん！孝ちゃんの言うとおりに！誰の子か分かんない！時々訳分かんなくなるの！『愛してる』とか『必要だ』とか言われると、分かんなくなっちゃうの！墮ろす！墮ろすからどこにも行かないで！」

千里

「いい加減にしない！」

美紀を離す、千里。

斑目、エレベーターへと姿を消す。

美紀

「孝ちゃん！孝ちゃん！孝ちゃん！孝ちゃん！」

千里、美紀頬を叩く。

千里

「しっかりしなさい！」

美紀

「…」

千里 「…母親になったのよ、貴方は」

海人 「…」

桜木 「…」

ユリ 「(煙草を吸い)滅茶苦茶だな」

段は様子をうかがい、ひかるはボーっと見ている。

段 「あれが穢れだ」

ひかる 「(静かに頷き)」

桜木 「…幸せって、何なんでしょうね」

一同、桜木を見る。

するとそこに、中年と若い男が入って来る。

中年・若い男 「(段とひかるの前に立ち)…」

一同 「…」

中年の男、警察手帳をチラッと見せる。

段 「(逮捕されるかと、視線を外し)…」

中年刑事 「大崎ひかるだな」

ひかる 「…」

若い刑事、面倒くさそうに令状を見せる。

中年刑事「連続詐欺容疑で逮捕する」

『両手を出せ』と、目線を送る中年刑事。

ひかる「(ボーっと窓の外を見て) …アダムとエバが見えます」

若い刑事、ひかるの頬を叩く。

ひかる「…白馬の山の頂上に、」

若い刑事、またひかるを叩く。

ひかる「アダムとエバが、」

若い刑事、またひかるを叩く。

ひかる「(豹変し) …痛ってーな、手前この野郎！」

一同「…」

ひかる「バンバンバン殴んじゃねーよ！手前！」

段「…」

若い刑事「何だと手前この野郎！騙した奴に金返せコラ！」

ひかる「そんなモンとつくにねえよ！包茎親父に言つとけ！」

態度が豹変したひかるを、唾然と見る一同。

段「詐欺って…その…彼女は資産家の令嬢で」

中年刑事「ただのスナック嬢だ。栃木で詐欺師やりながら働いて

たスナック嬢。キャバクラでもない、ただのスナック嬢。

田舎者のアバズレ」

段 「…」

中年刑事 「5年も追わせて…税金使ったよ」

ひかる 「(平然と、窓の外を見て)…」

中年刑事 「…平井悠樹さん。君が三千万騙し取った男」

ひかる 「…」

中年刑事 「彼だけ行方不明だ。まさか殺してなんていないよね」

ひかる 「…」

若い刑事 「吐けこの野郎！金もねーのに騙してブランド品買い漁

りやがってこの野郎！」

段 「…ひかる？」

ひかる 「(段に) ひかるとか呼び捨てにしてんじやねーよ！大体

手前がさっさと教団連れてかねーからこうなんだろうが

！洗脳したいんなら教団でやんのが筋だろ？何ホテル缶

詰にして人の乳勝手に揉んだよ！」

段 「…神が見えたんじゃないのか？」

ひかる 「見える訳ねーだろ。振りだよ、振り」

段 「…」

ひかる 「気を感じるか？感じねーよ、このインチキ教祖！…全く、宗教でも入りや人目につかねえと思ったのによ…計算違  
いだよ」

中年刑事 「殺したか？」

ひかる 「…知りたかったら一億出せよ」

クシヤツと微笑む、中年の刑事。

段 「ひかる、」

ひかる 「(大声で)うるせー！息が臭えんだよ手前！」

段 「…」

ひかる 「後一つ言っといてやる。あんた、超セックス下手だ  
よ」

段 「…」

手錠をはめ様とする若い刑事と、暴れ拒むひかる。  
段は信じられず呆然としている。

118

同・一階（昼）

舟木と澤井が帰って来る。

奥からは、暴れるひかるの叫び声。

舟木 「賑やかね」

澤井 「…」

舟木 「少し休む。晩御飯になったら起こして」

澤井 「先生、」

舟木 「久しぶりの撮影で疲れた」

舟木、微笑み一人でエレベーターへと消えて行く。

119

同・パーティー会場（昼）

暴れるひかるを床に倒し、取り押さえる若い刑事。

若い刑事 「動くな馬鹿野郎！」

ひかる 「止めろ！離せ手前！」

千里 「（怒鳴り）少し黙って！」

121	<p>同・ラウンジ (昼)</p> <p>舟木 「(死骸を見て) …」</p> <p>ふと床を見ると、いつかの蜜蜂が人知れず死んでいる。</p>
120	<p>507号室・中 (昼)</p> <p>若い刑事 「…」</p> <p>中年刑事が、冷静にひかるに手錠を掛ける。</p> <p>気が触れた様に泣きじやくっている美紀。</p> <p>千里 「(美紀に)息子がいるなんて嘘。死んだの、2年前に」</p> <p>美紀 「…」</p> <p>一同 「(静かになり) …」</p> <p>美紀を強引に、ラウンジへ連れて行く千里。</p> <p>海人 「…」</p>

美紀を座らせている、千里。

そこに海人がやって来る。

千里 「海人を見て」

海人 「千里を見て」

千里、鞆の中から一冊のノートを取り海人に渡す。

海人 「」

千里 「守の部屋から見つけました。最近ですけど」

海人 「」

千里 「守が苛められてたこと、何で先生私に言ってくれなかったのか、ずっと恨んでました」言ってくれば、守は死なずに済んだんじゃないかって」それでも思わなきゃ、生きて来れなかったんだけど。八つ当たりですよね」

海人 「」

千里 「」今でも、恨んでるのかも知れませんが。でもこのノート見て分かりました。守が、約束させてたんですね。私には、絶対言わないでくれて」

海人 「」



千里 「主人と私、上手くいってなかったから。心配かけたくなかったんでしょうね」

海人 「…」

千里 「情けないです。頼りなかったでしょうね、あたし。母と  
して」

美紀 「(千里を見て)」

澤井、急いで階段を駆け上がっていく。

海人がノートを捲っていく。

それは海人と守の交換日記になっている。

交換日記・文 「3月8日 今日はそのような苛められなかったからご  
安心を！ 守」

日記が声が変わっていく。

海人(声) 「3月9日 「そんな」とかそういう事じゃない。もっ

と俺に教師としての力があればと悔しく思う。でも諦め

ない。頑張ろう 海人」

ページを捲っていく。

守(声) 「3月25日 先生、『雪が溶けたら水になる』なんて答

えてるうちは教師としてまだまだだね（笑）。でも先生、春は来るんだよ、どんな人にも」

海人 「（読んで）…」

ページを捲っていくと、海人が学校を辞めた後、守が一人で交換日記を書いている。

※以下、自分の部屋で時折微笑みを浮かべて日記を書く守と、それを読んでいる海人のカットバック。

守（声）「4月2日 先生が学校辞めて一週間。最近、変だよ。変って言っても嫌な意味じゃなくてさ、先生学校追い出されてから、児玉が元気なくなっちゃって。苛めどころじやなくなっちゃよ。それで最近、昔みたいに児玉と良く話す様になってさ、お互いの家の事とか（楽しそうに）。あいつもやっぱ、苦しかったみたい。でね、驚くかも知んないけど、桜咲いたら、先生のとこ児玉と行こうって話になったんだ。あいつも責任感じてるからさ。良いだろ？それまでには、新しい仕事見つけとけよ。良い大人が、格好悪いからな。でも、全部先生のおかげだよ。な？一

個くらい、良い事あるだろ？」

日記を見つめている、海人。

海人 「…」

千里 「これ、見せようと思ってここに来たんです」

一同 「…」

千里 「でも何か悔しくて…先生、守に愛されてたんだなと思つたら…あたしは…何やってたんだろうって」

海人 「…」

千里 「あの子、ほんとに先生の好きだったから。だから…『もうきちんと生きて下さい』って言いに来たのに…何やってんだろう、私…」

千里、顔を歪ませ、泣く。

海人、ノートに顔を埋める。

斑目が荷物を持ち、ホテルを出て行くのが見える。

千里 「(美紀に) 堕ろすのも産むのも、貴方が決めなさい」

美紀 「…」

千里 「母親なんだから」

美紀、泣くのを止め、千里を見つめる。

澤井が拳で、ドアを叩いている。

澤井 「先生！先生！」

ドアを乱暴に開けようとするが鍵が閉まっている。

澤井 「（ドアの向こうに）：先生、私は俳優に向いてるでしょう

か？付いて3年、先生に教えて頂いた事吸収出来るでしょう  
か？未だに迷ってます、俳優を続けるべきか、辞めるべきか、全然答え出ないんです。でも先生、やっぱり僕芝居好きなんです。さっきの先生のお芝居見て、僕感動しました！役になり切って：その、農家のお婆さん  
にしか見えませんでした！どうしたら先生みたいになれる  
んでしょうか？教えて下さい、もう少しだけ教えて下さい！  
後一年やって駄目だったら田舎帰ります！」

ドアの中から、返事は無い。

澤井 「…来月、僕の舞台観に来て下さい。友達も居ないし、親にも頼めないし…チケットとか正直困ってるんです。で…飲みませんか？舞台が終わった後、僕への駄目出し看に…飲みませんか？付き人の僕がこんな事言うの生意気ですけど、飲みませんか！とにかく僕の舞台観て貰えませんか！」

必死にドアを叩く、澤井。

ゆっくりとドアが開き、舟木が顔を見せる。

舟木 「…うるさいよ」

部屋の中の天井から、浴衣の紐が吊るされてるのが見える。

舟木 「今の独白は本心？芝居？」

澤井 「…」

舟木 「芝居だったら70点。メリハリが足りない」

澤井 「先生…」

舟木 「ただ、良い線行ってた」

澤井 「(涙を堪え)」

舟木 「コーヒーでも飲もうか」

同・パーティー会場（昼）

ひかるを睨む、段。

段 「…人の事騙しやがって。大罪が下るぞ、お前には」

ひかる 「…人のせいにしてんじゃないわよ。インチキ教祖」

段 「インチキじゃない。昔はあったんだ。力」

ひかる 「…はいはい」

段 「（煮えくりかえり）お前は地獄に落ちるだろう！（ホテルを見回し）ここもだ！こんなホテル、来るんじゃないか  
った！」

満面の笑顔の桜木が、段たちの前に立っている。

桜木 「（笑顔）白馬ジャンプ台、行かれました？」

段・一同 「…」

桜木 「行けば良いのにー！あそこの上から眺める景色は最高ですよ！悩みなんて全一部吹っ飛んじゃう！」

125	<p>同・階段（昼）</p> <p>桜木が屋上に向かい走っていく。</p>
124	<p>同・ラウンジ（昼）</p> <p>ユリ 「壊れた」</p> <p>一同 「…」</p> <p>パーティー会場を出て行く、桜木。</p> <p>桜木 大声で話しながら、一人歩き出す。</p> <p>桜木 「行けば良いのに！みんな行けば良いのに！ずっと行つてって言ってるのに！」</p>
<p>海人 「…」</p> <p>千里 「（海人を見て）…」</p> <p>海人、走って追っていく。</p> <p>桜木が、全速力で階段を上がって行くのが見える。</p>	

## 同・屋上（昼）

海人が走って追っていく。その後ろに千里。

屋上の縁に立っている、桜木。

海人 「…止めて下さい」

目の前にそびえる、白馬ジャンプ台を見ている。

桜木 「何でみんな行ってくれないんだろうな？良い所だっ  
ってるのに」

海人 「…」

桜木 「知ってるか海人？あそこは1998年、日本ジャンプ陣  
が金メダル取った場所だ」

千里も駆けつける。

屋上から街の景色を見渡す、桜木。

桜木 「でも今は何も無いよ！少なくとも俺には何も無い！」

屋上の縁に足に乗せる、桜木。

海人 「…僕だって何も無い！…ただ、もう逃げません」



千里 「…」

桜木 「逃げないって何から？俺もう逃げる相手も居ないよ」

手を伸ばす、海人。

桜木 「…」

海人 「…」

桜木 「俺…もう…どうやって生きてきや良いのか、分かんないんだよ」

海人 「14歳の少年がいました。その子言っていました。生きてりや、そのうち良い事くらいあんだよって。一個くらいって、言っていましたけど」

海人、何だか微笑んでしまっている。

桜木 「…」

海人、守のノートを片手に持ちながら。

海人 「(笑顔)俺、ここに来て、一個見つけちゃいました」

桜木 「何笑ってんだよ！」

千里 「(そんな海人を見て、微笑み)…」

海人 「いつか、見つけましょうよ。一個」

海人、更に手を差し出す。

桜木が、ゆっくりと体を反転させる。

が、恐怖で膝がガクガクと震えている。

桜木 「実はさ、俺、高いところ駄目なんだよ」

海人 「(微笑み)」

桜木 「後、カツラが痒い」

海人 「苦笑しながら、近づき」

桜木を支えようと海人が近づいた瞬間、

桜木 「(また、下を見てしまい)怖えー！」

恐怖で、海人に抱き付こうと引き寄せる桜木。

海人 「え？」

桜木、抱き付いたままバランスを崩し、後方へ落下

していく。

桜木 「うあっ！」

海人 「おう！」

千里 「(悲鳴)！」

縁へ走り、下を見る千里。

沢山の赤い花が植えられたプランターの中、埋もれるように仰向けで横たわっている2人。

顔の周りに赤い花びらをつけて、目を見開いている。しばしの間があり、息を吹き返したように、震えながら息を吐きだす2人。

赤い花のプランターがクッションになり助かった2人。

ホッとしたのか、涙を滲ませている、二人。

桜木 「…落ちちゃったじゃねーか…」

海人 「…はい」

桜木 「…超怖かったじゃねーか！」

海人 「…はい」

桜木 「(涙を零しながら)…死ぬかと思ったじゃねーか！」

海人 「(涙を零しながら)…はい」

桜木 「良いこと一個、使っちゃったじゃねーか！」

海人 「(微笑み)はい」

そこに千里が息を切らせて駆け寄ってくる。

無事な二人を見て、ホッとする千里。

千里 「問題です。雪が溶けたら、何になると思いますか？」

海人 「(千里を見て)…」

千里 「(海人を見て)…」

桜木 「(あっさり)と…春」

海人 「え？」

桜木 「(涙を零しながら)…だから春。それがどうしたんですか  
！」

海人 「いや…そこは水って言うてくれないと」

千里 「(泣き笑い)」

桜木 「知らないよ！雪が溶けたら春になるんだよ！春になん  
だよ！」

海人 「(泣き笑い)」

桜木 「春は…来るよ！春が来るんだよ！春来るよ！」

泣き続ける桜木。

赤い花に埋もれ、泣き続ける二人。  
それを見て、泣き笑う千里。

パーティールーム（昼）

残された舟木、澤井、ひかる、段、ユリ、刑事達が  
佇んでいる。

中年刑事「（舟木に）…あの、俳優さんですよね」

舟木「…」

中年刑事「昔、良く見てました。刑事役のあなた…憧れてました」

舟木「…ありがとう」

ユリ「あたしも知ってる。再放送で観たことあんもん」

中年刑事「後で、サイン下さい」

鼻で笑う若い刑事の頭を、思い切り叩く中年刑事。

舟木が澤井を見て、少し微笑む。

ユリ「（少し、微笑み）コーヒーでも、飲みますか？」

皆、その言葉に、頷く。

海人、桜木、ユリが全員をお見送りしている。

桜木は、首にコルセットを巻いている。

桜木 「…お騒がせしました」

一同 「…」

桜木 「…これに懲りずに長野に来た際は、是非ホテルコパンへ

…(ひかるに)貴方も、出て来られたら」

若い刑事 「(ひかるに)乗れ」

若い刑事が、車のドアを開け待っている。

中年刑事に連行される、ひかる。

段 「(ひかるに)…救えなくて、すまん」

ひかる、振り返らずに立ち止まる。

ひかる 「…うるせー」

段 「…」

ひかる 「あんた言ってたな。『絶望の中で手を取り合える誰か』

って。そんなのいるのかね」

段 「いんよ」

ひかる 「(鼻で笑い) …あたし出てきたら、ババアだよ」

段 「いんよ。きつと」

ひかる 「…」

ひかるを乗せた車が発進し、消えて行く。

一同 「…」

美紀 「あの！」

一同 「…」

美紀 「(皆に)写真撮っても良いですか？皆さんと一緒に」

千里 「(美紀を見て、少し微笑み)」

ユリがぶつきらぼうに皆の立ち位置を決め、美紀からカメラを取る。

ユリ 「(皆に)行きますよ、はいチーズ」

皆、集合写真に納まる。

美紀 「(笑顔)」

映画のテーマ曲が、流れ始める。

130

山道（夕）

舟木と美紀が談笑しながら駅に向かい歩いている。

美紀・舟木「笑顔」

二人の後ろを歩く澤井、微笑ましく二人を見ている。

131

教団入口前（夕）

段が教団に帰ってくると、入口で待っていた麻子が立っている。

麻子「申し訳ありません」

段「…」

麻子「あたしの独断で、教団、解散させました」

段、力弱く、麻子の頬を叩く。

段「…」

麻子「…」

麻子、思い切り段の頬を叩き返す。



133	<p>白馬駅・改札 (夕)</p> <p>改札入り口に、切符を持った千里と海人。</p> <p>海人 「有難うございました」</p> <p>千里、それを聞き、微笑む。</p> <p>東京行きベルが鳴り始める。</p>
132	<p>ホテルコパン・玄関前 (夕)</p> <p>段、頷き歩き出す。横に連れ添う、麻子。</p> <p>麻子 「始められますよ。だってあたし、救われたんですよ？ 先生に」</p> <p>段 「…もう一度、」</p> <p>桜木が、赤い花を拾いプランターに戻している。</p> <p>その顔に、険しさは無い。</p> <p>ただ優しく、花を拾い戻していく。</p>

千里 「いつか花でもあげてやって下さい。春になったら」

海人に頭を下げ、ホームへと消えて行く千里。

田舎道にある踏切（夕）

オープニングと同じ踏切。

【チン、チン…】と音が鳴り、遮断機が下がって行く。そこで踏切が開くのを待っている、海人。

と、いつかと同じ優しそうな老婆が海人の横に並ぶ。

老婆 「(海人に微笑みかけ)…」

海人、少しの勇気を出して老婆に声を掛ける。

海人 「…良いお天気ですね」

老婆 「(耳が遠く)…え？」

海人 「(大きな声で)…良いお天気ですね！」

老婆 「ハイ!？」

海人 「…(更に大きな声で)良い!…」

海人と老婆の前を、東京行きの電車が通り過ぎる。

東京。都会の風景（春・4月）

千里の家・守の部屋（朝）

生きていた頃のままになっている部屋。

千里が掃除機を持って入ってくる。

部屋を見渡し、守の勉強机に座る千里。

手に持っていた写真を見る、千里。

美紀が送ってくれた、ホテルコパンでの集合写真。

写真を捲ると、もう一枚ある。

それは赤ん坊を抱いている美紀の写真。

写真に、マジックでメッセージが書かれている。

写真のメッセージ文『オバサンへ。喜び！』

それを見て笑う、千里。

机の上の充電器に置かれた、守の携帯を手取る。

千里 「（携帯電話を見て）…」

携帯電話の待ち受け画面は、小学校の卒業式に学校

138	<p>東京どこかの通り (午前)</p> <p>花束を持った海人が歩いてくる。</p> <p>守が車に飛び込んだ交差点に向かう、海人。</p>
137	<p>千里の家・外観 (朝)</p> <p>晴れ渡った良い天気。</p> <p>守の部屋から、掃除機の音が聞こえる。</p>
	<p>の正門で撮った家族写真。</p> <p>笑顔の千里、笑顔の守が桜の木の下で撮った写真。</p> <p>横には父親も写っている。</p> <p>千里 「(見て)…」</p> <p>守の携帯電話の電源を切り、机の引き出しに仕舞う。</p> <p>千里 「…よし」</p> <p>気合を入れた表情で、部屋の窓を開ける千里。</p>

一人の少年が花を手向けている。

その少年は―児玉優斗(16)。

海人 「(児玉を見て)…」

児玉 「(気付き、海人を見て)…」

見合う、二人。

海人が児玉に、頭を下げる。

児玉 「…」

児玉も海人に、小さく頭を下げる。

海人 「背、伸びたな」

児玉 「(少し照れくさそうに、頷き)」

児玉、去って行く。

海人、事故現場に花を手向ける。

ジュースや花が供えられた事故現場に、ホテルコパ

ンの玄関で撮った集合写真が飾られている。

海人 「(写真に手を伸ばす)」

すると春風が吹き、顔を上げる海人。

海人 「(先を見て)…」あ」

---

立ち上がり、交差点の先を見つめる海人。

吸い込まれる様に、車道へ飛び出す。

すると、海人にクラクションを鳴らし、トラックが通り過ぎて行く。

海人 「…」

海人、先だけを見て反対側へ渡って行く。

海人が反対側の通りに辿り着き、何かを見上げる。

桜の花びらが、見上げる海人に降り注ぐ。

海人 「(桜の木を見上げ、泣き笑う)…」

海人の目の前には、大きな桜の木。

満開の花びらを付けた、桜の木…。

【ホテルコパン 了】